

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-141	12-006	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)		
Excess Mortality of alcohol-Dependent Individuals After 14 Years and Mortality Predictors Based on Treatment Participation and Severity of Alcohol Dependence. アルコール依存者の 14 年間の過剰死亡と治療状況及び重症度による死亡予測		
執筆者		
John U, Rumpf HJ, Bischof G, Hapke U, Hanke M, Meyer C.		
掲載誌		
Alcohol Clin Exp Res. 2013 Jan;37(1):156-63.		
キーワード		
アルコール依存症、死亡率、治療、主観的健康度、喫煙		
要 旨		
目的： 一般集団におけるアルコール依存者の過剰死亡率とその予測因子についてはほとんど知られていない。我々は過剰死亡率を評価し、アルコール依存治療利用、アルコール依存重症度、アルコール関連問題、主観的健康度が 14 年間の死亡を予測するかを検討した。		
方法： ドイツの 1 地域における 18-64 歳の一般人集団のランダムサンプルを調査した。地域住民 4,070 人のうち、153 人のアルコール依存者が同定された。そのうち 149 人で 14 年後の生命予後が判明した。ベースラインの Composite International Diagnostic Interview (M-CIDI ドイツ版)には、DSM-VI によるアルコール依存診断、アルコール依存治療利用、重症度、アルコール関連問題、主観的健康観、喫煙本数、精神疾患数などが含まれる。		
結果： 年間死亡率は、一般集団の性・年齢別死亡率に比べて、女で 4.6 倍、男で 1.9 倍高かった。入院によるアルコール依存治療を受けた人は、治療を受けなかった人と生存率に差がなかった。入院による断酒治療の利用は死亡のハザード比上昇を示した (粗ハザード比 4.2)。アルコール依存重症度は断酒治療利用と関連していた。アルコール関連問題と主観的健康度不良は死亡の予測因子であった。		
結論： 高い過剰死亡率を見ると、対策の重点は女性に置くべきと考えられた。入院によるアルコール依存治療は早期死亡の防止にはつながらない可能性があった。断酒治療を受けた人だけにおいて、アルコール依存重症度、アルコール関連問題、主観的健康度が死亡の予測因子となるようであった。		